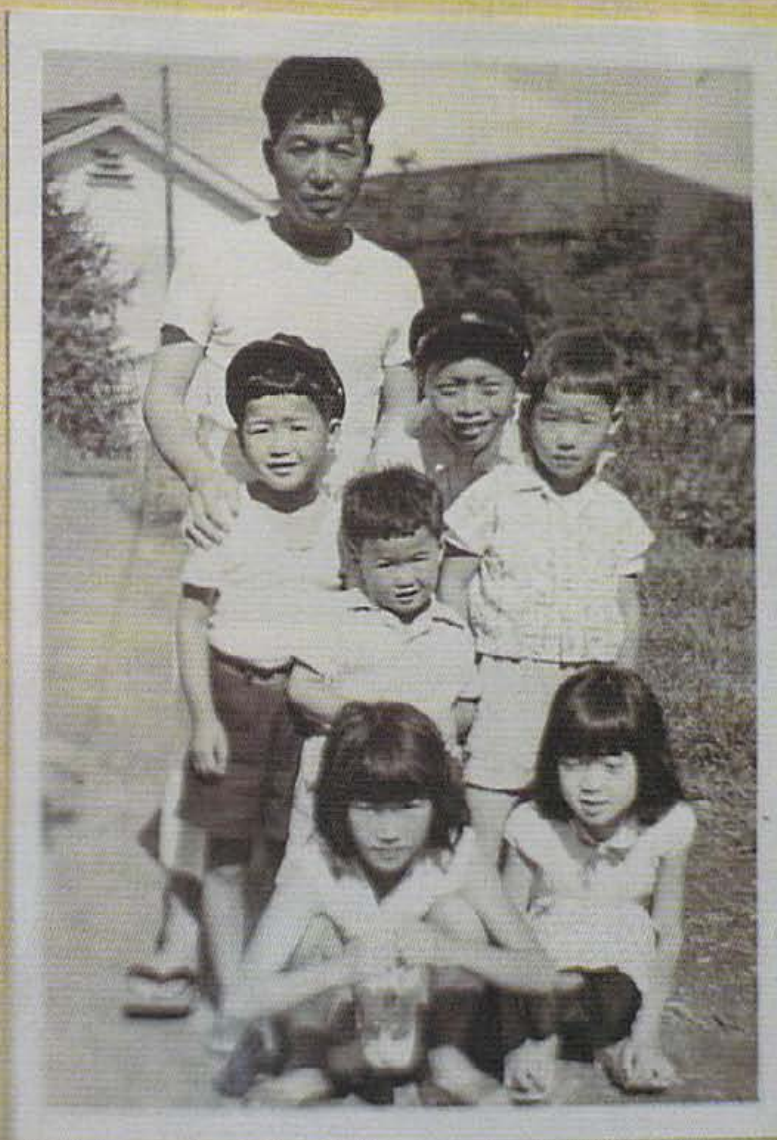


第四十五弾

「ガマさんのいた町・太秦組石町」編



赤いすば  
知りば  
標の町

京都市右京区太秦、組石町。

かつてそこに、

ひとりのやんちゃ坊主がいた。

彼は負けず嫌いの親分肌。

チャンバラごっこでは、

いつも片岡千恵蔵の真似をした。

サッカーボールの軌跡の彼方に

世界があることをまだ知らなかった、

そんな或る少年のエピソード…



「この獅子を遊び場として、家まで帰ったんだよなア……」



学校の校歌。釜本氏の「こんな歌でしてはうらやまの質問に、先生が歌って教えてくれた。」



めざとく氏を見つけた少年たちに囲まれて、「サイン会」がはじまった。

「彼」はやんちゃで根分肌。近隣に名を馳せたケンカ大将だった。一緒に遊ぶ仲間でも、言うことをきかないとコッリ。負けず嫌いも人一倍だった。

たどれば：  
むかし、メンコ遊びといえは負けたメンコは必ず没収されたものだ。みんなスポーツ選手や漫画のキャラクターなど、それぞれお気に入りの図柄があつて、取られたときは悔しい思いをしたものである。

だからメンコは、駄菓子屋で買ったものよりも、勝負による「戦利品」の方に値打ちがあつた。隣町へ「遠征」(そこには、新たなコレクションの収集が常に期待された)のときなどは、気合を入れて行ったものだ。そんなときである。仲間が他処の町の子とも負けようものなら、まるで自分のことのように嘆くのが常だった。

メンコの他にも、いろんなことをして遊んだ。場所はいつも広隆寺の境内。小石を弾にして、パチンコ合戦。境内の敷地が映画の撮影所と地つぎだったので、チャンバラごっこもよくやつた。もちろん何をやるにも「彼」が大将。チャンバラの主役、片岡千恵蔵役はいつでも「彼」のハマリ役だ。他の子ともたちは切られ役だが、みんな、「彼」には一目おいていた。

いたずらは？  
昔のカキ大将には、武勇伝が付きものだ。イタズラと聞いて「彼」の顔をスクに思い浮かべた大人たちがいたとしても、ちっとも不思議なことではない。

濃紺のダブルのスーツにサングラス。身長は百八十センチ、三センチというところだろうか。がっしりとした肩。ふ厚い胸板。

サッカー選手として、今ではいくつもの伝説と神話の主人公となった釜本邦茂氏。今、その人が広隆寺境内で感慨深げに佇んでいる。サッ

カーから離れ子ども時代の思い出を……そんな依頼に応えての取材だった。

広隆寺は「彼」、釜本氏が小学生時代によく遊んだ場所だ。なつかしい思い出は数多い。だが、しばらく氏の双眸は強く見開かれたままだった。質問にも寡黙である。人には、ときとして自分の胸にだけしまっておきたい記憶がある。曇り空の中で、氏は何に思いを馳せているのか。やがて……

「この広隆寺も、すいぶんかわりましたねえ。こんな建物あつたかなあ。きれいになったけれど、子レモの頃とはすいぶん違ってますよ」  
境内のあちらこちらを歩き回って、ようやく氏から感想らしい言葉がもれはじめた。京都にはよく立ち寄るそうだが、生家付近を歩き回るのは久しぶりのこと。思い出とはあまりにちがう光景に、しばし戸惑をかくせなかつた様である。

ひとわり境内を散策した後、急に釜本氏は、「このあたりに池があつた」と言いだした。寺のはずれ、幼稚園の前に来てヒタリと立ち止まり、ある方向を指し示す。

「ああ、もう埋まってしまつているなあ。ここに池があつてね。池の真中には小さな祠があつて、小さな橋もかかつていた。この池でよく鮎釣りをしたんだけどねえ。いちど、この池の水を干しあげたことがあつてね。泥だらけになつて魚をつかみに行つたのを憶えてるよ。たくさん採れてねえ。え？その魚はどうしたかつて？泥を吐かせて食べたんじゃないかな。もう忘れちゃつたよ」  
いつのまにか辺りが明るみ、青空がのぞいている。すこしづつ、氏の語り口もなめらかになつていた。

氏と散策する間、スポーツにまつわる子ども時代の逸話について尋ねてみた。毎日石ケリをして、石を正確に飛ばそうと工夫したこと。が、そもそもサッカーボールの蹴り方の



広隆寺のそばにある幼稚園。この付近にむかし池があり、鮎釣りをしたのだそう。今は埋められてしまつている。



「いやあ、釜本さんやないの。ひきしりやねえ、すいぶん立派になつてた。どうも、御無沙汰してます」



# 未だ知らぬ 標榜の町



懐かしい生家跡地。今は面影もない。



先のガラス店（有限会社・井上硝子建材）の井上社長。小さい頃、釜本氏とよく遊んだ思い出をたっぷり聞かせていただいた。



氏が久し振りに訪れた生家付近のガラス店にて、これはその店の先代主人の奥さんと、今の若旦那、釜本氏、この先代の奥さんにはよく吃られたらう。

基礎になったこと。兄と新聞配達をして、体力を養ったこと。あるいは野球をする際、あまりの強打者ぶりに左打ちを強いられ、それでもホームランを飛ばしつづけたこと。だが、どの逸話についても釜本氏は照れたように笑うばかりで、多くを語ろうとはしなかった。

たしかに「天才の軌跡」は、これまであまたとなくマスコミに取り上げられていた。久し振りに生家を訪ね、少年時代の思い出にひたろうとした氏は、もつとちがった質問を期待していたのかも知れない。

やがて太秦小学校にたどりついた。ここは氏の母校だ。しかし取材といえども学校はなかなか立入りを許可してくれない場所でもある。釜本氏は躊躇なく校門をくぐると、「こんにちは、釜本です！」と元氣よく職員室の扉をあける。先生たちは快く氏を迎え入れ、心配は杞憂に終わった。

四十年前、小学校の周囲はみわたすかぎり田畑がっつき、嵐山から西の山々が青く霞んで見えた。生家は小学校のすぐそば、小高い丘にあって。まるで足首に羽が生えたように風の中を駆け、上の中で泥だらけになつて遊んだ日々。途切れがちではあったが、氏はそんなことを繰り返して話してくれた。

しばらくすると、サッカーボールを手にした少年たちが先生に伴われてやってきた。彼等はシャツにサインしてもらおうと、そつとその上をゆびでなぞりながら、頬を紅くして駆けてゆく。世代を問わず、今でも「釜本邦茂」は憧れのスーパースターだった。

小学校や生家の跡地をめぐる後は、懇意にしていたという井上硝子建材店を訪れた。釜本氏をよく知る先代社長の奥さん、小さい頃に氏とよく遊んだ現社長の井上規夫さん、みんなが氏をとりかこみ、話を弾ませる。だが、約束の時間が来た。

タクシーに乗り込む釜本氏を見送りながら、井上規夫さんは次のような思い出を語った。

「野球が凄く上手でしたね。ボクら、釜本さんは野球選手になるんじゃないかと思つていたくらいです。ただ、釜本さん自身も言うように、世界を舞台にできるスポーツは野球ではなくサッカーだった。だから、サッカー選手を目指されたのですよね。今、振り返れば、やっぱり反面ですごくまっすぐな人だったと思います」

すべての取材を終えて、一息ついたとき、生家付近でめぐりあった老婦人の言葉が唐突に頭をよぎった。彼女は釜本少年の後ろ姿を、道すがらよく見うけたという。

「私はいつも、学校の中には入らず、塀の外からグラウンドを眺めていた釜本さんを憶えています。夕暮れ、じつと、いつまでもグラウンドを眺めていた。そんな後ろ姿をよくみかけたものです」四十年前のそのときその場所、少年の足跡は何を追つていたのであろう……

文／三村 深・写真／大田メグミ



生家跡地には入らず、塀の外からグラウンドを眺めていた釜本さんを憶えています。夕暮れ、じつと、いつまでもグラウンドを眺めていた。そんな後ろ姿をよくみかけたものです。



## PROFILE



**釜本 邦茂**  
京都市出身。一九四四年四月十四日生まれ。五十一歳。太秦小学校から鈴ヶ丘中学、山城高校を経て早稲田大学に入学。その後、ヤンマーティセル選手・同監督・松下電器監督を経てガンバ大阪監督に就任。現在は釜本スポーツ企画で少年たちにお愛敬「ガマさん」の由来はカマちゃんか靴つなものであつたという。中学校時代より本格的にサッカーをはじめ、京都を代表する選手に成長。山城高校時代は高校日本代表として活躍した。選手時代の「神話」については執筆に暇がないが、そのざわりを以下で紹介する。

★早稲田大学時代  
一年生出場よりセンターフォワードとして活躍。第四十三回・四十六回天皇杯で優勝経験。ちなみにこの時の早稲田以来、学生チームの優勝はただ一度もない。

★ヤンマーティセル（現セレッソ大阪）時代  
日本代表チームを三位に導く。また、国内では一九六七年より一九八三年までの十七年間で天皇杯に八回の決勝進出を果たし、四度優勝する。リーグの前身である日本サッカーリーグでも四度優勝。個人では日本リーグで三回（〇二得点という、不滅の金字塔を打ち立てた。なお、一九八四年八月二十五日の引退試合では国立競技場に六万八千人のファンが集結。友情参加選手としてフランスのベレ、西ドイツのオペラーツなど世界の一流選手が登録されたことはきわめて異例の出来事だった。これはサッカー後進国の日本で、釜本氏がいかに世界に通用する選手であったかを物語るエピソードとして、後に語り草となつた事実である。